

## 子どもたちと出会い

### 「教師としての魅力」を見つけられる

狭山市立水富小学校教諭 細田 公康

私は6年前の4月、埼玉県小学校教諭となりました。それまでは、商社という違う職業に勤めていて、30歳になってから選んだ教師という仕事に、心の葛藤がありました。「俺は大丈夫なのだろうか」

「他は新卒の人ばかり…」

そんなことを心の中に思っていました。ですが、今では教員としてのやりがいや魅力の日々実感しています。教師という仕事の一番の魅力は、子どもたちから元気を分けてもらえること、彼らが変わっていく様子を間近で見られることだと考えています。

忙しかったり、気持ち落ち込んだりしていても、休み時間や授業を通じて子どもたちに接することで、新たな気持ちをもてるようになることも多くあります。

また、「こういう子どもに育ってほしい」

という自分の思いを子どもたちにぶつけていくことで、子どもたちは少しずつ変わっていきます。できなかった問題を解けるようになったり、苦手なことにも取り組もうとするようになったり。毎日ではなく、たとえ数日に一回だとしても、そのような場面に出席することは本当に幸せなことだと感じています。

ある日のこと、漢字が苦手な子がいました。ミニテストで、他の子は平均90点以上なのに、その子だけは30点。時には、10点の時もありました。教え方をいくら変えても上手くいかない。そんな時に、ついこんな事を言ってしまった。

「ちゃんと覚えようとしているの。努力が足りないよ」

うまくいかないイライラから出てしまった言葉でした。その時の、子どもの悲しい

顔が今でも忘れられません。休み時間の時でした。その子が自由帳に一生懸命に何かを書いていました。その自由帳を覗くと、漢字の練習をしていたのです。

私は「しまった！」としまいました。すぐに、何度も涙を流して謝りました。その日から、子どもたちのせいにしない教師になること、そして、どんなことがあっても出来ない子を見捨てないことを心に決意しました。

教職のすばらしさは、教員になってみて分かることがたくさんあります。教員になって、まだまだ経験が浅い私自身が、新たな「教員の魅力」を探している段階にあると思っています。時にはうまくいかず、保護者から厳しいことを言われることもあります。私も何度か、悔しさから誰もいない教室で涙したことがあります。ですが、経験を重ねるほど、そして、より多くの子どもたちと出会うほど、そして、より多くの子どもたちと出会うほど新たな「教員の魅力」を見つけられる。それが教員という職業なのではないでしょうか。私は異業種から転職して、教師になったからこそ、より強く教師としても魅力を感じています。今では心の葛藤はありません。胸をはって「小学校教師の細田です」と言っています。

# 仕事を楽しめていますか？

川島ひばりが丘特別支援学校 若山 健太

みなさん、仕事は楽しいですか？もしかすると、日曜日の夜に「サザエさん症候群」

になったりしていませんか？多忙化が進んでいる今、部活や学校行事で、休日もないという方も多いかもしれません。職員室では、「パソコンがお友達」になつていたり、教材研究をする時間もなく、思うような実践ができなかつたり等々。確かに「つらいなあ」と感じる事が多々あります。そんな中ではありますが、私は「やつぱり先生って楽しいなあ、先生になつて良かったなあ。」と思います。なぜ、そう思い続けることができるのか。それは、私に「3つの存在」があるからだと思います。

1つ目は、なんとといっても「子どもたちの存在です。一緒に勉強をしたり、遊んだり。「こんなに楽しい時間はないなあ」と感じています。また、その中で、子どもた

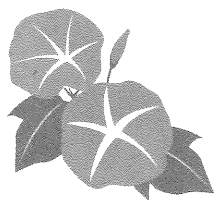
ちの成長にかかわることができ、先生って本当にいいなあと思います。

2つ目は、「学びの場」の存在です。「楽しい」とはいつても、指導をする中で「どうすればいいのだろう。」と悩むことは山のようにあります。一人で悩んでいると暗礁に乗り上げること。私は、組合や全障研の学習会やサークルに参加することで、「こうやってかわつてみようかな。」と、悩んでいたことに光が差してきて、月曜日が楽しみになります。私は、一人で悩みすぎず、学習会へ積極的に参加していくことをお勧めします！何かの研究サークルに毎年参加するのもいいと思います。

3つ目は、「学びの場」とつながってくるのですが、「周囲の人」の存在です。グループの先生方とは、子どもたちの話で盛り上がります。組合員も多い学校なので、学部

を越えて、学校のことを話すこともありま。学校外でも、青年部で野球観戦や飲み会をしたり、「地域交流会」で地域の方と話したりすることもあります。組合や研究サークルでも、親身になつて話を聞いてくれる方がたくさんいます。大学時代の仲間と年に数回集まつて、遊びに行つたり、飲んだりするのもいい気分転換になります。この「人のつながり」が、私の大きな支えとなつていきます。話せる人がたくさんいるというのは、本当に大切です。

色々書きました。一番大切なことは、「一人ではない」ということです。必ず、頼ることのできる「人」や「場」があります。ただそれは、学校内ではないこともありま。ぜひ、学校の外にも目を向けてみてください。そして、今の学校の問題は、個人やその学校だけでは解決できないこともたくさんあります。「子どもたちが笑顔になる学校」をともにつくっていきましょう！



# 新たに教職員になられた

## 皆さんへ

東京電機大学 前島 康男

新たに教職員になられた皆さんに、私がお伝えしたいことは以下の三点です。

まず、第一点目は、次のサムエル・ウルマンの「青春」という詩にあるように、常に「感動する心」「子どものような好奇心」「挑戦する喜び」など「若き精神」を失わないでいてほしいということです。

「青春とは／感動する心／子どものような好奇心／挑戦する喜び／真の青春とは／若き精神の／なかにこそある」

そのためには、十分休養もとるように努めるとともに、多様な人々と接するようしながら、心の栄養である、映画、演劇、音楽、絵本等に出来るだけふれることなども努めてほしいと思います。

心身ともに健康でフレッシュでいることが子どもたちと接する教職員という職業の場合特に重要だと思えます。

次いで、第二に、教職員として自分なりの実践スタイルの確立を目指してほしいということです。

そのためには、学校や民間研究会、組合研究会などで先輩や同僚教職員の優れた教育実践に出来るだけ多く学ぶとともに、職場教研や組合教研、そして民間教育団体の研究会などに出来るだけたくさん出席し、自らの教育実践をまとめたものを検討していただくことが欠かせない作業でしょう。

そして、それらの教育実践をまとめたものをいずれの時期に、一冊の実践記録にまとめることをお勧めします。

次いで第三に、述べたいことは、教職員の命に関わることです。現在日本の教職員の労働環境は、世界一長時間過密労働です。このような中で、教師の過労死・過労自死や教師の鬱等も問題になっています。例え

ば、学力テスト日本一を争う福井県では、10年間に9人の教師が過労死し、その多くが過労自死しています。そして、昨年福井県議会では、学力テスト日本一をあらそう競争が教師と生徒を苦しめているので、そのようなばかげた競争をやめようという趣旨の意見書をあげています。

このような労働環境や教育環境を変えるためには、組合員のなかまを増やししながら、他の働く仲間や多くの国民と協力し、教職員の増員などの労働環境の改善等に努めることが大切です。

しかし、新しい教職員の皆さんには次の私の言葉を胸に刻んでほしいと思います。それは、苦しく追いつめられたときは「逃げよう」ということです。いじめで自死した子どもの遺族は、必ず、なぜいじめで自死するくらいなら登校拒否をしてくれなかったのだと言います。苦しく追いつめられたら、まずは休んでゆっくり休養し力を蓄え、その後、前へ進んで下さい。

若い教職員の方々のご健康とご健闘を祈ります。

